

# 早暁の感動

東京・本郷にある親鸞仏教センターで開かれた「清沢満之研究会」

に参加させていただいた。本多弘之所長を囲む、真宗大谷派の若手研究者の勉強会だ。夏の集まりでは、伊東恵深研究員が「近代教学の課題——清沢満之と曾我量深の応答を手がかりとして」という発表をした。

真宗の近代化を模索していた曾我は若いころ、清沢や暁烏敏の「精神主義」に批判的だった。一九〇〇年、二十六歳で書いた「弥陀及び名号の觀念」では《清沢らの》直覚派は主我的なり、個人的なり、遁世的なり、独尊的なり、貴族的なり》

南	無
善	財

菅原伸郎

（彌生書房版『曾我量深選集』第一卷所収）などと論じている。

社会や倫理道德の課題に依えていない、という批判だった。消極的で、未来への展望がない、という不満である。当たっている面もあるように思うが、死の一年前だった清沢は「精神主義と三世」という論文で、逆手を取って《精神主義は現在の事に対する安住主義なり》（岩波書店版『清沢満之全集』第六卷所収）と「安心あんじん」の価値を説いていた。

近年、清沢哲学への評価が高まるにつれ、厳しい見方も出されるようになった。たとえば、末木文美士東京大学教授は『近代日本と仏教』（トランスビュー、二〇〇四年）で

「内なる沈潜は他者へ向かいうるか」と問いかけている。文脈はそれぞれ違うが、論者の多くは、精神主義が社会への関心が薄く、まさに《遁世的なり、独尊的なり、貴族的なり》と指摘しているように思う。

しかし、伊東研究員によると、曾我は途中から姿勢を変えている。清沢没後の一九〇八年に書いた「我に影向したまへる先師」（『選集』第二卷所収）という文章では攻撃的言辞が消え、世間から超然としていた「先生」を評価している。さあ、こ

の時期、曾我青年に何が起こったの  
だろう。私が思い出したのは、一九  
〇五年の「精神界」第五巻に発表し  
た随想「忽然骨鏤観に入る」だっ  
た。その一部を引用してみよう。

《厳冬の早暁、起て窓を排して静に  
聖典を繕く。是時吾人は忽然として  
骨鏤観に入る。勿論是れ吾人の予期  
せし所に非ず、吾人は此に依りて何  
等の物を得んと欲せず、而も是時吾  
人は無限大の量を有する骨鏤也。是  
時吾に防寒の衣服なし、皮膚なし、  
血液なし、筋肉なし、方万里の清寒  
の空気直下骨に迫るを感ず。一大骨  
鏤は正に宇宙の正中に巍然として聳  
立し、無限の彼方より清絶の虚気を  
呼吸しつつある也。是時骨鏤は正に  
力也、生命也実在也、絶対的的自我

也、至大の權威也。貴賤を絶し、貧  
富賢愚を絶し、美醜と毀誉とを離れ  
て尊嚴莊麗を極む》

「骨鏤観」は「こっさかん」と読ん  
で、中村元著『佛教語大辞典』によ  
れば、貪りや執着の心を克服するた  
めに白骨になることを観ずる行らし  
い。要するに、三十前後だった曾我  
は冬の朝、骨の髓までしみ入る宗教  
的感動を味わったのだ。

この文章は、小森龍邦著『宿業論  
と精神主義』（解放出版社、一九九

三年）にも引用されていた。部落解  
放運動の立場から、後段の《貴賤を  
絶し、貧富賢愚を絶し》の部分  
を傍観する態度」として批判してい  
た。たしかに、近代教学が克服しな  
ければならない課題だろう。

しかし、曾我の背景にこの宗教体  
験があったことも見落してはなるま  
い。浄土系仏教はとかく「この世で  
は悟ることができない」などとして  
軽視しがちだが、宗教にはこの感動  
がまず大切なのではないか。こうし  
た歓喜があつてこそ報恩感謝の念も  
生まれるように思うが、それは改め  
て考えていくことにしよう。

（すがわら・のおお／

東京医療保健大学教授）

